ひきこもり状態にある人が本人の望む方向へ変化した支援

ーきっかけ、大切にしている点、課題の質的分析ー

○　ルーテル学院大学　　氏名　福島喜代子（003144）

大曲睦恵（帝京科学大学・008924）

キーワード：ひきこもり・包括的支援・本人の意思

１．研 究 目 的

地域では、複雑で複合的な課題を抱える家族への支援が課題となっており、その一部はひきこもり状態にある人のいる家庭とされている。ひきこもり状態にある人は、どのような地域においても一定数おり、これら住民の、複雑化・複合化した支援ニーズには、包括的な支援が必要とされている。演者らは、全国の市町村社会福祉協議会を対象に、ひきこもり状態にある人への支援に関する質問紙調査を実施した。ひきこもり状態にある人の変化したきっかけ、支援で大切にしていること、課題と感じていることの自由記述を得た。そこで、本発表では自由記述の質的分析結果を報告することとした。

２．研究の視点および方法

全国の市町村社会福祉協議会（以下、社協とする）1735 か所を対象に、2024　年２月から 2024 年６月末までの期間、自記式質問紙調査を郵送法により実施し、489 箇所から回答を得た（回収率 28.2%）。また「本人が望む方向での変化がみられた」事例は 316 事例（有効回答の 64.6%）得た。本研究においては、事例の「大きく変化したきっかけ」と、社協としてひきこもり状態にある人への支援で「大切にしていること」「課題と感じていること」の自由記述を切片化、オープンコーディング、継続的比較、焦点的コーディングし、サブカテゴリーとカテゴリーを生成する質的内容分析を行った。

３．倫理的配慮

ルーテル学院大学研究倫理委員会の承認を得て実施した（申請番号 22-05）。本研究に関連して開示すべき COI 関係にある企業等はない。質問紙調査への協力は任意であり、調査の目的、個人情報等の扱い、データ保管・廃棄方法、公表方法等の説明書を同封し郵送した。回答者・対象者の匿名性を担保してデータを管理している。回答者による返送をもって、同意が得られたものとみなした。

４．研 究 結 果

「本人が望む方向での変化がみられた」事例の「大きく変化したきっかけ」について得られた自由記述からの 304 切片を分析し、13 のサブカテゴリー（[] で示す）、５のカテゴリー（【】で示す）を生成した。[繰り返しの訪問、つながり続ける][味方であり続け、意欲を引き出す][特技を生かし、生活に必要な支援][人との関わりを通して自信がついた]など【継続的な味方としての関わり】が変化のきっかけとなっていた。また、[危機感や刺

激から意欲が生成］されることや［タイミング］など【危機感やタイミング】もきっかけとなっていた。家族に関しては［家族の変化］、［家族の入院や死去］もあれば［家族親族からの働きかけ］も含めて【家族の変容と働きかけ】とした。［発見し支援を開始する機関］の存在や［経済的状況の変化］により【支援を受けて生活の質が変わる】こともきっかけとされ、［社会の中で居場所を得る］［社会の中で役割を実感する］ことにより【社会とのつながりの回復】がなされたことが、大きな変化のきっかけと認識されていた。

社協によるひきこもりの人への支援は、実践が積み重ねられており、「支援について、大切にしていること」をたずねた。244 の切片から、12 のサブカテゴリー、6 のカテゴリーが生成された。社協職員は、ひきこもり状態にある人への支援で［早期発見］に努め、［相手を受け入れ信頼関係を築く］【発見と関係づくり】を大切にしていた。そして、［本人の意向とペースを尊重］しつつ［ストーリーと興味関心を見出すアセスメント］に注力し、支援の開始後、［自己肯定感を高めつつ、支援は答えが出ないこともありとする］ことと［距離感を大切にしつつ長期に関わり続ける］を通して【本人の意向を尊重した支援】を大切にしていた。さらに、家族へは複数の方向性で［家族全体の支援］をすることもあれば、本人支援とは別に［家族の気持ちに寄り添いつつ価値観が変わるよう支援］し、【複数の切り口からの家族支援】がなされていた。包括的な支援、重層的な支援を行うために、［多機関・多職種連携］を行って支援をコーディネートしつつ、［居場所をはじめ社会とのつながりづくり］を大切にして、本人が【社会とのつながり】を作ることができることを大切にしていた。そして、［声やテンションにも配慮した支援］として【支援者側の留意点】も意識されていた。なお、［介入を控える］という【控え目な支援】は2セグメントのみであり、全体的な方針ではなかった。

一方、支援で「課題と感じていること」については、205 の切片から6カテゴリーが生成された。支援のためには【把握、発見をすること】、【関係づくりと本人意向の把握】が課題となり、本人と対面的な状況で支援をはじめても、【受け止めと変化のバランスのある支援】、【家族の変容と家族調整】、【地域で包括的に支援をする仕組み】が課題となっていた。また、社協職員は、【事業成果への期待】を課題と感じてていた。

5．考 察

ひきこもりの人が大きく変わるきっかけとして、繰り返しの関わりや、社会とのつながりの回復が認識されていた。一方、危機感、家族構成・生活の質の変化等もきっかけとなっていた。支援で大切とされていたのは、発見すること、本人の意向を尊重した支援、社会とのつながりの回復等であった。大切にしている点と課題は表裏の関係で重なりが多かった。社会福祉協議会による支援であるためか、生活困窮等は特段「課題」として認識されず、それよりも支援のバランス、家族の変容や関係調整、包括的な支援の仕組みづくりなどが課題と認識されていた。＊本研究は JSPS 科研費の助成を受けた JP 22K02045「社会的孤立状態にあるひきこもり者と家族に対する重層的支援モデルの研究」の成果の一部としてまとめたものです。